

# 人文学会報

No.79号  
2018. 3. 16

事務局 鹿児島市下伊敷一丁目52番1号 県立短期大学文学科研究室  
鹿児島県立短期大学 人文学会

電話(〇九九)三〇一―二二一

〈研究室だより〉

## 教員ロボットの スイッチを切ろう。

文 フィリップ・アダメック  
(挿絵 川口道野)

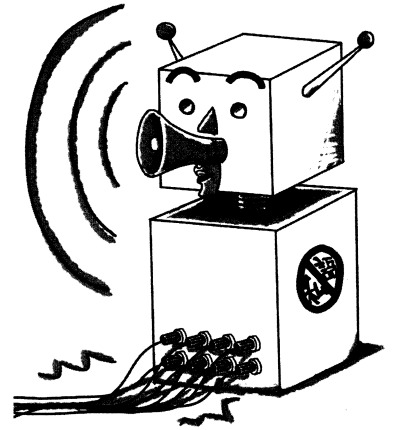
県立短期大学で12年間勤務してきた中で、多くの学生や職員の方々に親切にしていたことにとっても感謝しています。在校生やこれから入学してくる学生に役立ててもらえるであろうことをこの場でお話することで感謝の気持ちを表したいと思います。

学生たちは学期ごとに「授業改善のためのアンケート」を記入するようになっていきます。日本人の学生は私が以前教えていたフランス人やアメリカ人の学生に比べて、そうしたアンケートへの記入に戸惑っているように思えることに気がつ

きました。「楽しかったです」が一番よく書かれているコメントですが、そのようなコメントは内容が不十分であると思われるわたり、学ぼうえで具体的に何が楽しかったのだろうかと思われてしまうかもしれません。しかし、少なくともそのコメントからは、のびのびと授業を「楽しむ」自発的な姿勢が感じられます。実は、このことは「授業についての項目で出てくる7つの質問についての改善点でもあり、学生たちは「そう思う」から「そうは思わない」までから番号を選択して率直に回答することが求められます。

仮に教員ロボットがいたとして、そのロボットが行った授業について「授業改善のためのアンケート」を記入すると想像してみましょう。そのロボットは先に述べた7つの項目全てで高評価を得ることができるとしよう。近年の音声認識のソフトの進歩が非常に役立ちます。①良

いシラバスを作ることができるだけでなく、ロボットはシラバスに忠実に従うこともできます。②教員ロボットにはメガホンがついてるので、ロボットの声は全員にちゃんと聞こえます。③もちろん、進め方にも同じことが言え、時間に正確に授業を進めることができます。④教員ロボットが「丁寧」に対応することができるか、また⑤「授業内容はよく理解できた」かどうかという点については、丁寧な言葉遣いだけをするようにプログラミングされていて、理解ができたか定期的には欠かさず確認します。⑥学生たちが教員ロボットから知的刺激を「受けた」という質問については知的刺激がどのような意味なのかによります。ですが、教員ロボットのスイッチが切られたら、知的刺激は学生たちが「受ける」ものではなく、彼らが自ら「行う」ものとして



定義されるであろうことは確かです。つまり、自分の考えを授業の内容にインプットすることができるようになるのです。⑦学生の私語が少なかったかどうかという最後の質問については、小さな声でこっそり話している学生を認識したら、教員ロボットは席につないであるワイヤーに電気ショックを流します。そうすれば授業中の私語という問題はなくなり、全員が「そう思う」と回答できるのです。

しかし、たとえ教員ロボットがそれらの項目で高評価を得たとしても、その講義が楽しいか、「学び」(education)という面で価値のあるものかという点で疑問の余地が残ります。そこで、アンケート

トの最後にある小さな「自由記述欄」が用いられるのです。しかし、学生たちはどのようにしてその欄を活用すればよいのでしょうか？ 意義のあるコメントを考えるうえで「ある人に魚をあげればその人はその日食べていくことができる。しかし、その人に魚の釣り方を教えれば一生食べていくことができる」ということわざが役立つと思います。それはすなわち、授業を担当する教員はまるで学生に魚をあげて、後でその学生がまだ魚を手元に持っているかを確認するだけのようにある知識を暗記することだけを求めるかどうかということです。もし講義がそのようなものであるならば、たとえ教員が大きな声で話していたとしても、学生の私語がほとんどなかったとしても、学び(education)という点では低く評価されても仕方がないと思います。逆にその講義が終わった後も他の場面ですっと使える学び方を教えてくれたのなら、教員の声が小さくても大丈夫でしょう。また、役に立つことを学んでいるので、授業の内容をしっかりと理解するならばシ

ラバスに載っている進め方と異なっても気にならないでしょう。その授業は楽しいかもしれないし、取り立てて楽しくはないかもしれませんが、授業中に私語があっても、色々な言葉に触れながら学ぶこと(education)ができるでしょう。そして、教室の中でじっと教員の目を気にして過ごしながら学びが制限されるということはなく、人生においてそれらの授業の経験は大切な部分となるでしょう。最後に、もし教員の声が小さかったり、私語などが授業の妨げになることに気が付いたら、教員の近くに座るようにしてみてください。それでも、問題が解決しないようでしたら、授業のあとで教員と話をしてください。そのような問題は学期末近くになって対処するのではなく、気づいた時に対処するのが望ましいです。学ぶうえで大切なことに集中し、その講義は創造力を養うことができるものなのか考えてください。その講義は学生が内容に対して意見を持つことができるものでしょうか？ 自分で考える力を身につけることができるものでしょうか？

ここで述べたちよつとしたアドバイスが役に立つことがあれば嬉しいです。県立短期大学で教えることができたことに感謝し、日本で教えることができました良い思い出をこれからも大切にしていきます。

(文学科英語英文学専攻 教授)

## 〈卒業にあたって〉

### 色褪せない二年間

文学科日本語日本文学専攻

石原美里

卒業を前にして思い出すのは、県短に入学する前に母から言われた、「短大の二年間はあつという間だよ」という言葉です。言われた時はあまり実感がなく、二年間という時間が自分にとつてどのような時間になるのかも想像がつきませんでした。

でも、初めてのスーツに袖を通して、不安と緊張を抱きながら迎えた入学式を昨日のことに思い出すと、ああ、本当に二年間はあつという間だったな、と感じます。目まぐるしく過ぎてきた毎日を思い出すと、思わず笑みがこぼれてしまうくらい、そして、少しばかり涙が滲んでしまうくらい、充実した二年間でした。楽しいことも、辛いことも、嬉しいことも、苦しいこともありました。良

い思い出ばかりじゃなく、嫌な思い出ももちろんあります。それでも、県短での二年間は自分にとってかけがえのない宝物になったと胸を張って言えるほど、大事な時間を過ごすことが出来ました。

県短での生活を思い出す中で、最も強く印象に残っているのは教職課程のことです。入学当初は取るつもりがなかった教職課程を選択したのは、短大での二年間をふらふらと過ごしてしまいそうな自分を律するため、そして、将来の目標を見つけれない自分に、何らかの目標を見つけられるようにするためでした。しかし、教職課程は思っていたよりもはるかに過酷で、逃げ出したくなる時もありましたし、文句ばかり言ってしまう時もありました。それでも諦めずに最後までやってこられたのは、私を含めて教職課程を選じた十二人の日文生のおかげだと思っています。二年という時間の中で、周りよりも多い講義数についていけなくなりそうな時も、たくさんさんのレポートに追われて四苦八苦している時も、互いに励ましあい、士気を高めあっていた仲間



と出会えたことは、かけがえのない宝物になりました。また、二年間を通して何かをあきらめずに続けられたことで得た達成感は、これからの人生の中で必ず役に立つのではないかと思います。

就職のこと以外にも、思い出はたくさん出来ました。鬼ごっこをした体育祭や、

某CMの三太郎をパロディした秋の文化祭での舞台発表、学内開放での模擬店、サークル活動、就職活動、卒業論文のことなど、思い出せばきりがないほどです。二年という短い時間の中でこれほど多くの思い出を作ることが出来たのは、日文の皆と、そして日文の先生方に出会えたからだと思います。三十三人の日文の皆は、本当に個性が爆発している人たちでした。おかげで毎日飽きることなく、楽しい学生生活を送ることが出来ました。話すことはたわいもないことばかりだったけれど、笑いが絶えない会話は心地よくて、こんな時間がもう少し続いてくれればいいのにと願ったこともありました。卒業して、もう同じような会話をすることはないのかもしれないと思うと

寂しくなります。県短に来なければ会うことのなかった日文の皆に出会えたこと、そして先生方に出会えたことは、簡単なことのように感じてしまふけれど奇跡のようなことでもあるのだと、卒業を前にして感じました。

春から私は社会人になります。今までとは違った毎日を送ることに、正直不安も感じていますが、少し楽しみでもあります。新しいことを始めるのに臆病だった私が、新しい生活を楽しみだと感じられるようになったのは、県短での二年間があったからかもしれません。あつという間に過ぎ去ってしまった時間の中で見つけた宝物が、「がんばれ！」と春からの私の背中を押してくれるような気がしています。卒業してからの道は皆ばらばらになってしまします。本当に寂しいですが、泣き言ばかり言っていられませんが、いつかまた、皆と再会した時に笑ってたわいもない会話ができることを祈っています。県短で過ごした色褪せない二年間の思い出を胸に、これからも精進していきたいと思います。

## 二年間を振り返って

文学科日本語日本文学専攻

池田成海



私にとっての二年間は、短くも充実した日々でした。卒業を前に、これまでの学校生活を振り返ってみようと思います。

入学して間もない頃は、進路変更して本当に良かったのか、と自分に問い続けていました。国語が好きで言語にも興味があったものの、文転という自分自身の決断を受け止めきれずにいたのです。そんな私の気持ちを変えてくれたのが、多くの友達との出会いや学校生活を通して得られた経験です。卒業を控えた今は、「県短に入学して良かった、日文のみならず学べて良かった」と心から言うことができます。

日本語日本文学専攻の授業は、ことばと文学で満ち溢れていました。その中でも、言語学や日本語学は大学に入って初

めて専門的に学びました。授業を重ねるごとに普段何気なく使っていることばの不思議さと魅力に気付き、その世界に引き込まれていきました。そして、外国人の日本語学習の場を見学できたことも印象に残っています。私たちが日常会話として使っている日本語や国語として学ぶ日本語だけでなく、外国人にとつての日本語も学ぶことができ、視野が広がりました。また、一年生の後期から日本語学のゼミに所属し、卒業論文の作成も始めました。時間をかけて取り組んだ分、書き上げた時の達成感は大きく、良い経験ができたと思っています。

一年生から所属していた自治会での活動も貴重な経験です。情報部として南日本新聞のミライページの記事作成、県大祭のパフレット・ポスター作成など、広報の仕事に携わりました。初めてのことでうまくいかないことも多く、苦労した面の方が大きかったように感じます。しかし、たくさんの方の協力と「県短の魅力をより多くの人に知ってもらいたい」という思いで最後までやり抜くことがで

きました。自分たちで企画などを行うことは決して簡単ではありませんでした。が、活動を通して思いを形にして届けることへのやりがいや強く実感しました。また、自治会役員として数多くの学校行事にも携わりました。その中で専攻や学年を超えたつながりができ、学校生活がより充実したものになったと感じています。

二年間の中で授業や自治会の活動と同じくらい大きな比重を占めていたのが、公務員試験に向けての勉強です。一年生の一月からダブルスクールをしており、平日は、県短の授業が終わり次第公務員学校で勉強をする、休日は自習室で一日中勉強するというサイクルを繰り返していました。周りの友達が次々と内定を勝ち取っていく中、ひたすら勉強の毎日でした。様々な活動との両立で辛い時期もありましたが、これを継続することができたのも、面接や履歴書添削などの指導をしてくださった学生課の方々や同じ志をもった仲間、いつも一番近くで支えてくれた家族のおかげだと思っています。最終合格をいただいた時の喜びは大き

く、今でも忘れることができません。そして、目標に向かって努力を重ねた日々は、私にとって大きな自信にもなりました。たくさんの方との出会い、様々なことを学び、経験した二年間は私にとつてかけがえのない時間となりました。四月からは社会人になり、新しい生活が始まります。これまで県短で学んできたことを胸に、より一層自分を高めていきたいと思っています。最後になりますが、この二年間支えてくださった先生方や職員の方々、日文のクラスメイトなど、すべての方々から感謝しています。この気持ちを忘れずに、新たなステージでも頑張っていきたいと思っています。二年間、本当にありがとうございました。





## 県短で過ごした時間が

## 私にくれたもの

文学科英語英文学専攻

羽生 愛菜



卒業を前に今一番思うことは、県短で過ごした二年間は本当にあつという間

だったということです。真新しいスーツを着て入学式に出席したあの日が、ついでこの前のことのように感じます。みんなと一緒に授業を受けたり、お弁当を食べながら話したり、課題やレポートについても追われたり……、挙げればきりがありませんが、今までは普通だった何気ない日々をたくさん思い出して、今ではとてもしみりしています。

私が県短に入学した頃は、大学生活への期待や楽しみという気持ちよりも、むしろ第一志望の大学に合格できなかったことへの気持ちを整理する時間が必要で、ネガティブな気持ちの方が大きかつ

たです。そして、県短での学生生活を心から楽しむことができるかという不安もありました。しかし、一つの専攻が三十数人でクラスのような感じだったので、英文のみんなと仲良くなるのにもそんなに時間はかかりませんでした。私はあまり騒ぐようなタイプではないのですが、英文のみんなが盛り上がりつついたり笑い声が聞こえたりする空間と時間が大好きでした。

いかと思います。みんなの頑張りのおかげで、本番では最優秀賞を取ることができて本当に嬉しかったです。その夜にみんなで打ち上げをしたこと、後日に賞金で焼肉を食べに行ったことは今でもいい思い出です。

英文全体の仲や絆が深まる大きなきっかけとなったのは、一年生での文化祭だったと思います。私たちはハイスクール・ミュージカルをしたのですが、全員が舞台上に立つようにしたいという思いからダンスを取り入れました。みんな練習する時間があまり取れなかったのですが、ダンスの振り付けを覚えてかつ正しく踊るのが私には難しく大変でした。そんな時には、ダンスの得意な人がゆっくりと時間をかけて教えてくれたので、少しずつよくなっていきました。練習の取りかかりは遅かったです。どの専攻よりも短期集中で夜遅くまで残って練習したのではな

授業では、英文専攻というだけあって英語にまみれていました。高校では英語を話す授業が全くなかったのですが、自分のスピーキングには不安しかなかった。しかし、オーラル・コミュニケーションという先生も外国人で英語しか話せない状況に置かれることで、以前よりはスピーキング力を上げることができたと思います。また、周りには海外に留学したことがある人、海外に旅行したことがある人など、海外経験がある人や英語を流暢に話せる人が多かったことから刺激を受け、常に自分の未熟さを痛感していました。

二年生の夏、私は人生に関わる大きな決断をしました。私は県短に入学した頃から卒業後は四年制大学に編入しようと強く心に決めていました。しかし、たくさんの方を考慮し、悩みに悩んだ上で進路を変更

することにしました。私の相談にたくさん  
のアドバイスをくださり、背中を後押しし  
てくださった石井先生には本当に感謝して  
います。私の決断に家族がどのような反応  
をするのかとても不安でしたが、「自分の  
人生なんだから自分の決めた道ならいいん  
じゃない」と新しい夢を応援してくれまし  
た。そのことには、感謝の気持ちを忘れな  
いようにしようと思います。そして、これ  
からは今まで迷惑をかけた分、親孝行をし  
ていこうと思います。

最後に、私は県短に入学して心からよか  
ったと今では胸を張って言えます。それは  
たくさん素晴らしい先生方やかけがえの  
ない友達との出会いがあったからです。そ  
して、新しい人生を切り開くことができ  
からです。もし県短に入学していなけれ  
ば、今の私はきつとなかったでしょう。こ  
の二年間は本当に短かったですが、時間以  
上に密度の濃い学生生活を送ることができ  
ました。これからは、それぞれが別々の道  
に進むこととなりますが、県短での思い出  
を胸に一緒に頑張っていきましょう。

See you!



文学科英語英文学専攻

川口 道野

二年間の大学生活が終わる。学業のな  
かで、あるいは同じ学生の皆と過ごすな  
かで、色々な事を経験した。けれど、私  
はそれとは別のところで実現した、ある  
一つの夢について書きたい。それは、ずつ  
と仲良くしていた外国人の友達と会うと  
いう夢だった。

彼女はメキシコに住んでいて、私が中学  
生のときにインターネットを通じて知り合  
った。二人とも同じロックバンドが好き  
で、絵を描くのが好きだった。今読み返  
すと目を覆いたくなるような拙い英語で  
メールを送り、お互いに絵を描き合った。  
七年余りが経った現在でも仲の良い、大  
切な友人の一人だ。そして昨年の夏、彼  
女から「九月に海外研修で東京に行くこ

とになった！」というメールが届いた。  
迷いはほとんどなかった。私は「東京で  
会えないかな？」と提案した。

彼女と実際に会うということは、それ  
まで私の将来の目標だった。「彼女とも  
っと話したい。いつか会う日のために、  
もっと英語を学びたい。もっと素早く、  
自然な英語が出てくるようになりたい。」  
そういった思いは、それまでやってきた  
英語の勉強のモチベーションであり、私  
が県短の英語英文学専攻を選んだ理由の  
一つだった。それほど私にとって重大な  
出来事だった。まさかこれほど早く実現  
するとは思っていなかったから、楽しみ  
な反面、彼女とちゃんと話せる自信がな  
かった。なにしろ教員以外の外国人と話  
した事が無い。それに、夏休みで英語を  
話す機会がほとんどなくなってしまっ  
ていた。彼女の話す英語をちゃんと聞き取  
れるだろうか？ 私はちゃんと会話でき  
るだろうか？ 日程を決め、お土産を詰  
めている間もずっと不安だった。けれど、  
英語ができなくてもコミュニケーション  
が一切取れない訳じゃない。とにかく全

力を出ししかない。そう自分を励まして東京に向かった。

当日、待ち合わせの場所で彼女と初めて会った時、不安も、学んできたはずの英語も吹き飛んだ。もう何を言ったらいいかわからなくて、とにかく会えたことが嬉しかった。彼女と彼女の友達が行きたいところを一緒に回った。あの日の自分を評価するなら、ぎりぎり六十点くらいだ。聞き取れないこともあったし、言いたいことをどう言えばいいかわからなかったこともあった。正直なところ、落ち込んだ。しかし、行くべきではなかったとは微塵も思わない。それでも話せたことは色々あったし、あれほど不安だったのに、別れる頃にはまだ一緒に居たいと思ってしまうくらい、楽しくてかけがえのない時間だった。

この長年の夢の実現は、私が自分で叶えたものというより、突然舞い込んできた二度とないチャンスだったと思っっている。それは、自分が未熟なのを知っている、見逃すことはできない、絶対にしがみ付かなければならないものだ。思い

返せば、この二年間はそういつた出来事が次々と舞い込んできた気がするけれど、おそらく、考えようによってはどんなこともかけがえのないチャンスになり得るのだと思う。ここ県短での学生生活も、今学べることに、今過ごせる時間を精一杯吸収する、今しかないチャンスだった。そういった気持ちはどこかにあったからか、私にとって大学での授業は本当に楽しいものだった。時には辛くて受講を辞めたいと思いつつも、どうにかやり遂げた時には「なんだかんだ、楽しかった！」と思いつつ直していた。今、私は卒業後の自分がどうなっていくのかはわからない。けれど、きっとこれからも「今しかないチャンス」が次々と現れるのだと思う。絶対に見逃せない機会やきっかけを掴み取りたい。自分の精一杯の力で、それをものにしたい。そうすれば後悔することはないと、私は信じる。この二年間、学生として過ごした時間で得たものを、確かな力にしていきたい。

《編集後記》  
アダメック先生に、二号連続での執筆をお願いすることとなるとは思っていませんでした。75号の中谷先生に続いてちよつと急なご退職になりました。母国での活躍を祈念しております。

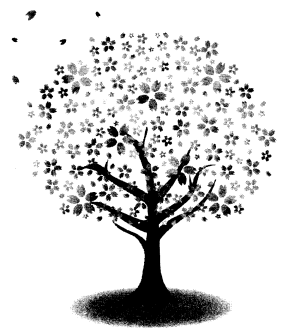
「彙報」は次号に掲載します。また、次こそは秋の号を出したいと思えます。申し訳ありません。

『人文学会報』は文学科ホームページ

(<http://www.k-kentan.ac.jp/it/>)に掲載

しています。『人文』の方はKARN 鹿児島県学術共同リポジトリの運用が終了し、鹿児島立短期大学リポジトリ

(<https://k-kentan.repo.nii.ac.jp/>)での公開に変わっています。(望月)





## <平成29年度卒業研究標題>

### 文学科日本語日本文学専攻

#### 氏名

#### 卒業研究標題

#### 《木戸ゼミ …… 日本文学・古典》

- 石原美里 『とりかへばや物語』における女君の〈幸せ〉について  
～作品に描かれる女君の〈幸せ〉はどのようなものなのだろうか?～
- 川野光 『大和物語』における監の命婦の位置づけについての研究
- 竹内優梨 『百人一首』の巻頭と巻末について ―巻頭と巻末に天皇を据えているのは何故か―
- 新山優樹 古典文学における猫またの成り立ちと特徴の変化についての研究
- 福満あさ陽 『竹取物語』の対比について ―獲得と喪失の物語―
- 眞邊利加子 『枕草子』 「生い先なく」の段から見える清少納言の女性観
- 森田真由 『源氏物語』若菜巻における「中の戸」の意味と紫の上の立場の変化

#### 《竹本ゼミ …… 日本文学・近代》

- 伊藤鈴夏 「砂の女」における語りについて
- 今村詩織 「屋根裏の散歩者」における小説形式と人物描写についての考察
- 木佐木彩莉 「桜の樹の下には」を読む
- 久木崎麻衣 「終戦のローレライ」における史実と虚構について
- 酒匂真美 星新一作品における固有名詞についての研究
- 白瀬瑞季 夏目漱石『それから』 ―真珠の指輪が贈られた意味と役割―
- 本園礼菜 夏目漱石著『こゝろ』における御嬢さんの恋愛感情とKの自殺の関連についての研究
- 藪慎太郎 「人間椅子」の主人公の背景と椅子という選択の意図

#### 《土肥ゼミ …… 中国文学》

- 柏井風香 西王母の使いはなぜ青い
- 小森由紀 陶淵明の酒へのこだわりについての研究
- 田中咲良 『聊齋志異』と蒲松齡、「痴」の関連
- 徳永夏歩 性悪説から読み取る荀子の考え
- 西田有沙 中国の結婚についてと、『列女伝』とその他の作品との女性の比較
- 堀添真子 志怪小説の墓と恋愛についての研究
- 森日南子 李白と道教の関係
- 諸留詩織 『孫子』について

#### 《望月ゼミ …… 日本語学》

- 石黒なぎさ 星野源の歌詞分析について
- 城ヶ崎健蔵 AAA日高光啓とラッパーSKY-HIが使う言葉の特徴
- 竹中未矩 コミック版『らんま1/2』の調査 ―中国人キャラクターの役割語について―
- 濱田来望 早口言葉について
- 吉村朱音 動物キャラクターの役割語について ―『ONE PIECE』の場合―

#### 《楊ゼミ …… 日本語学・日本語教育学》

- 池田成海 広告キャッチコピーにおけるストラテジー ―脱落がみられる表現を例に―
- 下西桃子 少女漫画で見る「告白」 ―現実の「告白」と少女漫画の「告白」の特徴比較―
- 萩原みな子 年代差における笑いの手法の違い ―「笑点」と「IPPONグランプリ」を比較して―
- 濱平真里奈 談話標識の生起頻度の違いについて ―フォーマルとインフォーマルの場での差―
- 二又川瑞穂 ことばの使いかたについての意識調査  
―日本語日本文学専攻の学生とその保護者の世代間比較―

## ＜平成29年度卒業研究標題＞

### 文学科英語英文学専攻

氏 名	卒 業 研 究 標 題
<b>〈英米文学演習〉 (指導教員：轟 義昭)</b>	
飯 干 実紅凜	映画『美女と野獣』の比較
上水流 愛 梨	映画から考察したLGBT問題の比較 — 『リリーのすべて』と『彼らが本気で編むときは、』 —
川 口 道 野	『レオポルドとロープ事件』を題材とした映画作品の比較研究
久 保 百 加	ディズニー作品におけるマレフィセントの変貌 — 『眠れる森の美女』と『マレフィセント』の比較—
園 田 も え	映像作品の比較による日本と英国のホームレス
西 川 未来仁	ジェーン・オースティンの結婚観 ～愛か金か～
<b>〈英米文学演習〉 (指導教員：フィリップ・アダメック)</b>	
緒 方 里 紗	On the Benefits and Challenges of Modern Street Art
佐 倉 こはる	The Climbing Life of Alex Honnold
本 田 まりあ	A.J. Jacobs and Rachel Held Evans on Biblical Living in Modern Times
宮 後 早 希	US Flag Fashion
村 山 夕 佳	The Comic Commencements Speech in America: The Cases of Will Ferrell and Natalie Portman
湯 田 喜	Should There Be No-nos in the Naming of Newborns?
下 宮 千 佳	Understanding LGBT People: The Case of Paul Fairbanks
<b>〈比較文化演習〉 (指導教員：小林 朋子)</b>	
荒 田 十和子	グリム童話からみるジェンダーの諸相と子供像
駒 寿 濤	アフリカ系アメリカ人の「アニー」が誕生するまで — 『小さな孤児アニー』と映画『ANNIE / アニー』(2014)の比較—
白 木 利 佳	生き続けるロック — アメリカ音楽史におけるカウンターカルチャーの一側面—
福 永 凜	死を生きた男の第二次世界大戦 — 『出発は遂に訪れず』と『永遠の0』から見る文学的表現の相違—
真 辺 志 信	『老人と海』から見る島嶼文化 — ジャン・ユンカーマンとアーネスト・ヘミングウェイ—
丸 田 鈴	音楽が人々に与える影響 — アフリカ系アメリカ人と障がい者の音楽への関わり方の比較を通して—
米 満 美 樹	ロアルド・ダールとティム・バートンの作品から見る少年時代の記憶について
<b>〈英語学演習〉 (指導教員：遠峯 伸一郎)</b>	
要 華衣弥	RightとJust
高 良 夢	日英での繰返し表現における上位語の容認度について
四 本 望	前置詞inのイメージと用法
若 元 真 也	『容疑者Xの献身』における減訳される会話文の文末の接続表現について
永 田 彩 乃	英語否定接頭辞と付加する語の関係
<b>〈英語学演習〉 (指導教員：石井 英里子)</b>	
有 馬 寛 大	Using picture books in Japanese elementary EFL classrooms
市 来 佳 子	Reducing Japanese college students' language anxiety
岩 元 結 花	Japanese junior college students' motivation to study English
大 江 すみれ	The advantages and disadvantages of using group work in Japanese elementary EFL classrooms
中 原 瑞 希	Japanese university students' cross-cultural exchange experiences with international students
羽 生 愛 菜	What personality types make Japanese secondary EFL learners hesitate to speak in English?
堀之内 麻 友	Japanese junior high school students' perceptions on in-class English speaking activities
本中野 紗 音	Using songs in Japanese secondary EFL classrooms
馬 渡 望 華	The present conditions and problems of elementary school English education in Japan